■研究十二月往来〈263〉

万華鏡の中の建礼門院

佐伯真一

大原を訪ねた後白河法皇一行が寂光院のほとりの庵に着いた時、建礼門院は花を摘みに行っていた。やがて戻ってきた女院の姿は、「花がたみひぢにかけ、岩つゝじとり具してもたせ給ひたる」（覚一本平家物語）というものであった。山中に入って花を摘むのは卑賤の者のしわざとされていた仕事である。また、花がたみを持った姿が零落した小町を連想させるものであることは、既に多く指摘されている（水原一『平家物語の形成』、久保田淳「大原御幸」観世一九八二年五月、岡田三津子「謡曲《大原御幸》の人間像」『説話論集・二』）。即ち、『玉造小町子壮衰書』に登場するみじめな姿の女は、蕨を入れた破れた筐（あじか）を左のひじにかけていた。この女は中世には小野小町と同一視され、同様の表現は、たとえば謡曲「卒都婆小町」などにも受け継がれている。また、『無名草子』の語り手の老尼も、「花籠」をひじにかけた姿で、若女房達に「小野小町がひじに掛けけむ筐よりはめでたく」などと言われ、小町によそえられている。女院は、まずは彼女たちに類する〈落魄の貴女〉として、法皇の目に映ったといってもよいだろう。

それは、仏道に帰依し、平家一門と安徳天皇の亡魂供養につとめる〈聖女〉としての像とも矛盾しない。花を摘むのはもとより仏に供えるためであり、女院はひたすら阿弥陀仏の来迎を待ち望んで暮らしていた。そして、法皇に対面した女院は、自らの人生を六道になぞらえた、いわゆる「六道語り」を語る。これが、日蔵などの高僧が冥途をめぐったという冥界訪問説話の類型をふまえていることも、既に著名であろう。謡曲「大原御幸」で、法皇が、女院の六道体験について、「仏菩薩の位ならでは見給ふ事なきに不審に候へ」と尋ねているのは、そうした説話の伝統をふまえたものである。〈落魄の貴女〉であるが故にこそ、天上道から地獄道まですべてを経験したという語りが可能なのであり、それが即ち〈聖女〉の資格となる。語り本『平家物語』や謡曲「大原御幸」に見える建礼門院像は、基本的に、この〈落魄の貴女〉にして〈聖女〉という像であるといってよいだろう。

しかし、読み本系の『平家物語』に目を向けると、大きく異なる建礼門院像が見えてくる。まず、四部合戦状本では、法皇は御幸に際して大原での「御同宿」を考えていたとする。つまり、御幸の目的は本来、女院との同宿にあったが、近臣達が「頼朝にどう思われるか」といさめたため同宿は思いとどまり、御幸のみ決行したというわけである。源平盛衰記でも、法皇は女院を自分の御所に迎えたかったが思いとどまったと描く。このように、嫁と舅というより男女としての愛情を意識した描写がなされるには、それなりの背景があろう。水原一前掲書や角田文衛『平家後抄』が指摘するように、治承五年（一一八一）に高倉院が亡くなる直前、高倉院没後には建礼門院を法皇の後宮に入れるという案があったという。『玉葉』同年正月十三日条によれば、建礼門院の激しい拒絶によってとりやめになったのだというが、頼朝挙兵以降の難局の中で、平家が法皇との関係修復をはかる案としては、あり得ないことではない。実際、清盛の厳島内侍腹の姫君が、この時期に法皇に差し出されたのだが、それは『玉葉』によれば建礼門院の代わりだったというのである。そして『玉葉』によれば、建礼門院は拒絶したのだが、後白河法皇はその気だったように

見られる。また、『平家物語』諸本は、建礼門院の御産における法皇の熱心な祈祷を描くが、延慶本などの記述では、そこに何やら意味ありげな様子も見て取れる。

つまり、法皇の目に映ったのは、あるいは〈愛欲の美女〉としての女院だったのかもしれないのである。ひじに下げた籠に入っているのは、『玉造小町子壮衰書』のような青い蕨ではなく、手折ったばかりの岩つつじなのであり、それを持っているのは老いさらばえた小町ではなく、未だ三十歳あまりの女院なのである。墨染めの衣姿とはいえ、そこにほのかな色香を読み取ることは十分に可能であろう。しかも、延慶本や盛衰記、四部本などにおいては、建礼門院の六道語りは愛欲懺悔としての畜生道語りを含んでいる。「畜生道」は、語り本では壇ノ浦合戦後の明石で見た夢の中の竜宮城が宛てられ、謡曲「大原御幸」では「駒の蹄の音聞けば、畜生道の有様を見聞くも同じ…」とあっさり片づけられているが、延慶本や四部本などでは、同母兄弟である宗盛や知盛との近親相姦の噂であり、盛衰記では義経との噂が加わる。そのような愛欲の穢れの底に沈んだ女人像は、〈聖女〉の対極にあるともいえようが、筆者は、それもまた中世日本の〈聖女〉の像の一つなのだと考える。今そのダイナミックな論理について詳述する余裕はないが、たとえば和泉式部も愛欲の底に沈むことによって〈聖女〉の資格を得たと語るのが、中世の物語群である。建礼門院もそれに似た枠組みの中で語られて不思議はない。

さて、盛衰記や四部本、長門本などにはもう一つ、〈恨む女〉というべき建礼門院像がある。女院は法皇に問われて重い口を開き、やがて六道になぞらえて自分の人生を語る―というのが、語り本『平家物語』などに描かれる二人の対面だが、盛衰記では、しばらくの沈黙の後、「涙ノ隙ヨリ」口を開いたのは女院の方だった。そして女院は、「年比日比ウラメシク思召ケル御事共ヲ崩シ立テ」て申し上げた、つまり、積る恨みを法皇にぶつけ、並べ立てたというのである。平家都落ちの時、法皇は西国へ同行するはずだったのに、平家を裏切って都に留まり、それからは源氏の兵を使って徹底的に平家を攻めさせた。そのおかげで、私達がどれほど辛く悲しい目にあったか、おわかりですか……恨みを激しくぶつける盛衰記などの女院像は、語り本などのつつましい〈聖女〉像からは遠く離れている。しかし、現実の女院と法皇の関係を知る者にとっては、このような場面がないほうがむしろ不自然に感じられるのではないか。このような〈恨む女〉としての女院像が『平家物語』の古層にあるのかどうか、確定することは難しいが、実在の女院にこうした心情があり得たことは否定できないだろう。

実在の女院に近いといえば、安徳天皇を失った〈嘆きの母〉としての女院像があることを、最後に見ておきたい。壇ノ浦合戦場面は、語り本『平家物語』では六道の中の地獄道に位置づけられるが、延慶本などでは六道語りとは別に語られる。そして、大原御幸説話の古い形の一つを伝えると見られる『閑居友』においても、女院は主に壇ノ浦合戦と安徳天皇の追憶を語っている。謡曲「大原御幸」が、壇ノ浦場面を最後のクライマックスに据えるのも、故のないことではない。壇ノ浦合戦とはもちろん平家一門全体が滅亡した事件だが、女院にとっては安徳天皇の入水こそが、その中核である。それは、ただ一人の息子をわずか八歳で失った母としての、そして日本史上ただ一人の海底に沈んだ天皇の母としての、悲嘆と懺悔の語りなのである。この〈嘆きの母〉としての語りにこそ、実在の建礼門院に最も近い、切実な声を聞くべきなのかもしれない。

大原御幸の物語における建礼門院像は、このように、多様な像を含んでいる。少し角度を変えるごとに異なった模様を見せる万華鏡のように、読み方を少し変えるだけで、女院は異なった人物に見えてくる。いや、研究者としては、万華鏡の比喩などで喜んでいる場合ではない。その多彩な女院像を整理し、相互の関係や構造を解明すべきなのだが、それはこの小文には過ぎた課題である。いずれまた別の機会に、ということにさせていただく。

（青山学院大学教授）